

第11回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

テーマ

呼吸する家

人が空気を体内に取り込みそれを吐くことを繰り返す「呼吸」は、生命の基本です。

「家が呼吸する」ととらえたとき、それは一体どんな建築になるのでしょうか。

家が、雨や風、地域社会や他者などさまざまなものを拒まず取り込むように呼吸をはじめると、そこには生き生きとした関係が見えてくると思います。

反対に、今社会問題になっている空き家や、外に閉ざし関係を遮断するような住宅は呼吸をしていないといえるでしょう。

本コンペでは、さまざまな意味で「呼吸」をとらえ、その場所での生命観の溢れる家の提案を求めます。

敷地は、架空でもリアルでも自由に設定してください。しかしどのような街のどのような場所に建つかという敷地のプロフィールを表現してください。

その敷地に、戸建てでも、戸建ての集合でも、併用でも、集合でも、形式は問わない家のあり様の提案を求めます。

住まいが呼吸をするとこんなに楽しいのだという、新しい家のアイデアを期待します。

【審査委員】

審査委員長

小嶋一浩

建築家 CAIパートナー
横浜国立大学建築都市スクールY-GSA 教授

審査委員

堀部安嗣

建築家 堀部安嗣建築設計事務所
京都造形芸術大学大学院教授

平田晃久

建築家 平田晃久建築設計事務所

西村達志

大和ハウス工業代表取締役専務執行役員

【登録方法】

・本コンペに応募される方は、事前に下記ウェブサイトから登録を行ってください。
・課題、応募規定の詳細についてもウェブサイトをご覧ください。

【提出物】

A2サイズ(420x594mm)片面横使い1枚。図面、パース、ドローイング、CG、模型写真など表現は自由。敷地は任意に設定してください。ただし、どのような街のどのような場所に建つかという敷地のプロフィールを表現すること。

【登録・作品提出締切】

2015年9月24日(木)消印有効
送付のみ受け付けます。持込み、バイク便は不可。

【賞金】

最優秀賞(1点) 200万円
優秀賞(2点) 各30万円
入選(4点) 各10万円
(以上、1次審査通過7作品)
大和ハウス工業賞(1点) 30万円
佳作(10点) 各5万円
総額380万円 ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。
※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金金額の配分を変える場合があります。

【1次審査結果発表】

2015年10月上旬
通過者に通知するとともに、ウェブサイト上发表します。

【公開2次審査】

2015年11月4日(水)
会場：大和ハウス工業 東京本社
観覧応募などの詳細は、10月上旬の1次審査結果発表と同時にウェブサイトに掲載します。

【2次審査結果発表】

『新建築住宅特集』2016年1月号およびウェブサイト上发表します。

登録・提出締切：2015年9月24日(木)消印有効

<http://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社 後援：株式会社新建築社



Daiwa House
大和ハウスグループ

「息を吸って吐く家」を考える



座談会風景。左から、西村氏、堀部氏、小嶋氏、平田氏。 撮影：新建築社写真部

座談会参加者

小嶋一浩

(建築家・CAIパートナー
横浜国立大学建築都市スクールY-GSA教授)

堀部安嗣

(建築家・堀部安嗣建築設計事務所
京都造形芸術大学大学院教授)

平田晃久

(建築家・平田晃久建築設計事務所)

西村達志

(大和ハウス工業代表取締役専務執行役員)

第11回を迎えて

西村 今回の、ダイワハウスコンペティションは第11回を迎えます。前回の第10回の「みちの生まれる街」では「街」という大きな集合体をテーマにしたところ、ちょっとしたアイデアで鮮やかに街並みを変える優れた案が公開2次審査に残りました。今回は、本来このコンペがテーマとする「住宅」に立ち戻ったうえで、前回に引き続き内容を深めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

小嶋 前回はテーマをずいぶん練り上げました。プロとして設計をする人が考えなければならない問題を投げかけましたが、逆にいえば大学の学部生には少し難しすぎる面がありました。アイデアコンペなので、入口は幅広い層の人がアプローチできる方がよいですね。しかし住宅へ課題を戻すといっても、戸建て住宅の形態を操作することを今さら競い合っても仕方ありません。住宅と深く向き合ってもらにはどうしたらよいのかをここで考えたい。この前、『新建築住宅特集』編集部で行った世田谷区の「家びらき」という活動の取材の話を書きました(本誌1505「記事：空き家から始まるコミュニティ」)。これがとても面白い。高齢単身者が住んでいる家を、増改築をテーマとするのではなく、空いている所を上手く使おうという試みです。空き家になりかけている家を、使うことで空き家化しないようにすることだと理解しました。世田谷区での活動は、まだ建築家が表立って参加するものは少な

く、市民レベルでの段階ですが、ちょっとした塀や生け垣に建築家が手を入れるだけで、だいぶ現れ方は変わらぬでしょう。そう考えると、かなりいろいろな可能性がありそうです。既存の住宅にしても、新築にしても、住宅を制度に取り込まれたものとしてとらえず、住宅とはそもそも何なのか、現代の日本社会において、再定義するようなアイデアを見たいと思います。

社会の問題を空間の質にフィードバックする

堀部 今の若い世代は、相対的にしか建築を考えられない癖がついていると思います。ワークショップでも、みんなで一緒に関係を持ち、相対的に建築を考えるのは得意ですが、一方で圧倒的にかつ絶対的な美を追求しようとはしない消極的な雰囲気を感じます。そこで、あえて圧倒的で絶対的な住宅の美しさをテーマとするのもありではないかと思っています。

平田 絶対的な美もあると思うのですが、まず、何をもって美しいというかを再定義する気持ちで建築をつくるべきだと思います。個人やひとつの家族だけが充足して閉じている像ではなく、もっといろいろなことが入り込んでくる生命観を美しいといい切るような、周囲との関係性をとらえないと本質的に建築の問題になってきません。閉鎖的に美しさを考えるのではない、ということであれば、僕は共感できます。

堀部 まだ世の中との関係性もよく分かっていないのに、大人びて、すべて分かった振りをしてプログラムを組み立てていくことに危惧があります。関係に対して妄想が広がっていくとか、脆弱な建築の表現になることが多いと思います。つまり彼らはすごくよい子ちゃんになっているのです。空き家問題や高齢者、現実の大人がつくった問題を土台にして、きれいきっぱりと問題を解いてしまったかのような雰囲気の建築になってくる(笑)。そうではなく、もっと建築に対する愚直な美しさに向かい合うものが生まれてくればすごくよいと思います。

小嶋 よい子ちゃん問題は、根本的な問題のような気がします。例えば被災地への支援活動をしていると、彼らは「何とかしてあげよう」とする。よい子ちゃんだからニコニコ頑張るのです。しかしこれを僕らは揶揄しているばかりでもだめです。世の中には建築の問題に踏み込むよりも、その手前でなんとかしなくてはならないことがたくさんありますよね。彼らはそこに素直に向き合っているからこそすごく自分の力になっている部分もある。僕らが若い頃は建築を背負ってしまっていたのですが、今の若い世代は背負わずしてコミュニケーションによってそこにある問題を見出そうとする。背負っている人間からすると、動きが悪いというか、もたもたしているというか……。堀部 背骨はどこにあるのか、と。



記事「空き家から始まるコミュニティ」(本誌1505)

小嶋 そう思うわけです(笑)。ただ、一概に絶対的という定理を立てない建築の向き合い方にも、逆に説得させられる面もありますね。

堀部 もちろんです。

編集部 今の若い世代にどう問いかければ、彼らにしか考えられないようなものが提案できて、かつ、今起きている社会の状況をしっかり見ることができるか。前回のテーマ会議で堀部さんが「自分の普段歩いている道がどうやってできているのかを一度応募者が見直すことが重要なのではないか」とおっしゃっていましたが、世の中の状況をつぶさに建築の問題として見られるか、というのは重要な投げかけです。

堀部 こんな話があって、お互いのコミュニケーションもなかったある地域の空き地に、大量のソーラーパネルを設置するという計画が立ち上がりました。景観が壊れて、排水などいろいろな問題が発生することが分かり、そこではじめて住民どうしが結束したのです。「毒を以て毒を制す」ではありませんが、地域の問題や課題が浮き彫りになることで、コミュニティを生み、その問題自体の解決に向かうことがあると思うのです。きれいごとだけではないことが提案できる仕組みがくれたらと思います。

西村 それは必ずしも住宅でなくてもよいですね。他者を住宅に呼び込むためのアイデアや、住宅そのものを設計するのではなくても、例えばソーラーパネルでも、あるいはコンビニでもよいのですが、そのひとつの存在が周りの住宅にどういう影響を及ぼすのかを考えることは面白いと思います。

平田 その時に、やはり建築の構えの問題にしないと魅力のある案にならないと思います。特定の社会的関係性を前提として、きちんと適合しているからこの住宅はよいのだといわれても、あまりときめかない。空間がもっている質の問題にフィードバックしてこないと案として成立しないと思います。ある特定の社会的問題をフォーカスし過ぎるあまり、一見その設定の中では問題がよく考えられているようでも、建築そのものがあまり考えられてない案が出てきても面白くないのではないのでしょうか。

「他者」を受け入れるということについて

堀部 昔は当たり前のように住宅の中で行った葬式や法事など、家に他人が入り込む行事が今はほとんど外に出ています。だからって単に昔に帰ろう、というのではない住宅の面白さとは、どんなものなのでしょう。

編集部 例えば土間や町家のように昔からあるものを、現代において、どう読み替えるのかという考え方はあるかもしれませんが。家族以外の他者が入ることを許す家という時、その他者とは何かについて考えて、どうしてその状況が必要なのかについて考えてほしいと思います。そこに美しさがあるといいですし、建築ときちんと結び付いていればよいと思います。

平田 ここでいう他者は、人でなくてもよいのですよね。極端な話、動物だっ

たり、自然の流れだったり、住宅が何かに晒されている状態があり得るという提案だとしたら、それは他者ではないでしょうか。

小嶋 高齢単身者がずっと家の中でテレビをつけていて、そのテレビを他者だとするとところから始まる提案があったら、それも面白ければありだと思います。

西村 私は前回のコンペで入選した「雨ふり、水たまりまち」という水たまりをきっかけとする案がとても印象的なのですが、人間以外のものがひとつの存在として出てくることで、建物の考え方がこんなに生き生きしてくる、という案ならとても面白いと思います。

小嶋 そうですね。アイデアコンペなので、ひとつの方向性を呈示してしまうテーマでない方がよい。読み間違えていても、すぐく飛んでいる案は歓迎すべきだと思いますし、意図的な誤読は大歓迎です。

平田 最近台湾に行くことが多いのですが、台湾には地域によってまだ野犬がうろついているところがあります。僕が幼い頃は日本にも野犬がいるところがありました。それ自体はよいことだとは思いませんが、その時代の家の概念や、虫が入ってくることにに対するおおらかさなどは、この20年、30年で急激に厳しくなつたと感じます。この話は一見無関係に思えますが、実はそういう話と関係あるのではないかと思うのです。もう少し適当に開いている状態が住宅の質として求められているような気がしています。

堀部 同感ですね。今はそういうものをシャットアウトしてしまいますから。

「毛深い建築」と「呼吸する家」

編集部 家族以外の他者を許す家とはどういうものなのか、ということがテーマとして見えてきています。

平田 小嶋さんは以前、パリの「ケ・ブランリー美術館」(設計:ジャン・ヌーヴェル/2006年)を「毛深い建築」と表現されていました。面白い言葉だと思います。「毛が生えている」というのは繋がりがあるということですが、それを具体的に住宅の縁側といってしまうと既存の要素に吸着してしまいます。

西村 毛深いという言葉は、たしかにいろいろな意味がありますね。入り込んでいるという意味もあるし、地肌の色は外から分からないということも含まれます。そういう意味ではまさに呼び込むというか、踏み込むことを誘発する象徴論的な言葉なのかもしれません。

堀部 大きくは他者を受け入れるという意味ですね。それを魅力的な言葉に置き換えたい。

小嶋 では、「呼吸する家」といつてしまうのはどうでしょうか。人の入れ替わりが起きるような、閉じているだけのものではないという意味をもたせて。

平田 例えば、最初にあった「家びらき」

の話は、空き家という窒息した状態になる前に、呼吸している状態に戻してあげよう、ということになりますか。

堀部 受け入れて、来るもの拒まずということは、呼吸していますね。

小嶋 拒まないという言葉はよいですね。社会は毒ガスではない、という考えですね。あるいは水中に沈められたものがパッと上がって息を継ぐ、みたいな提案があつてもよい。

堀部 何を呼吸するのかということですね。

平田 呼吸する、というのは、入り込んでくる、出ていくことに生命観を見出すよい言葉だと思います。そこに周囲との関係性、美しさを考えることもできる。

西村 人によっていろいろな切り口がありそうで面白そうですね。ここではあくまで住宅といっていますが、単体の戸建てに限らず、集合住宅や、商店との併用、戸建て住宅の集合体といったように、設定も自由にしたほうがよいでしょう。

小嶋 今回「家」をテーマとしていますが、呼吸は家だけのものではなく、建築の問題です。どんな方向から切り込んでもよいですし、コンペですから、パッと見て訴求力のある表現をしてほしい。今回は敷地をこちらから与えるのは避けたい方だと思います。ただし応募者は漠然とした場所を設定するのではなく、自分自身にとってその場所が生き生きとして見えるという表現はしてほしいです。

堀部 他者が入ることを許す住宅とすると、点ではなくて、線あるいは面をもった計画になってきますね。その家だけではなく、隣の家や、その辺りにはどういう人たちがいるのかも考えなくてはいけない。大きさにいうと街の設計、環境の設計に繋がっていってしまう気がするのですが。

小嶋 今回はそこまでハードルを上げていません。被災地で単身や高齢独身者のための公営住宅を建てていますが、公営住宅法でしぼられていても、繋がりをもち得るつくり方と、孤独死を招くつくり方があると思います。

堀部 なるほど、あくまでも敷地内で完結できるつくり方ですね。

小嶋 オーバーランする提案が出てくるのは構いません。ただ、基本的には敷地内の住宅の振る舞い方、敷地内で収まるアイデアとしましょう。

堀部 応募者がそれぞれの提案に適した敷地をしっかりと考えてほしいですね。

編集部 では、今回のテーマは「呼吸する家」で決定したいと思います。また、敷地は任意に設定してもらいますが、どのような街のどのような場所に建つかという敷地のプロフィールを表現することも求めたいと思います。

応募者に期待すること

堀部 僕は、よい住宅のプランは呼吸しているというか、家の細胞のすべ



てが生きているものだと思います。誰も通らない廊下があつたり、誰も使わない部屋が片隅にあるならば、それは家が呼吸していないということです。細胞が死んでいる。街の空き家問題にも繋がることです。だから「呼吸する家」は、「よいプランをつくる」ととらえるのもありでしょう。すべてが生き生きしている、稼働率が高い、風通しがよいと。今、あたりまえに住宅に入っている要素をひとつなくしてみるだけで、急に風通しがよくなることもあるかもしれません。

平田 呼吸するというのは生きていることの基本です。高度な生物は息を吸って吐きますが、もうちょっと原始的なレベルでは、物質の交換が常に行われている、という話にも繋がってきます。つまりメタボリズム、新陳代謝している。そこでは都市のスケールにいたるまで建築も中の人も、そこにある物質も常に交換されていて、ある意味では呼吸しているといえます。そういう世界観でもう一度建築をとらえ直す時に、どんな生き生きとした美しさがあるかということに関係する課題ではないかと思います。

西村 最初に「呼吸する家」という言葉を聞いた時、思いついたのは「深呼吸」という言葉です。定常的な呼吸と違い、深呼吸するとすぐリフレッシュして、自分自身が生きていることを再確認して、新しい可能性を感じますね。ほかにも社会性ということ考えると、他者に対して「呼吸しているかな?」と脈や呼吸を確認するような関係があるはずです。

小嶋 単純にいうと、呼吸していないのは死んでいるということです。空き家に限らなくても、近代社会の最果てにある日本には、呼吸していない家はたくさんあるのではないかな。つまり仕方なしにそれを家と呼び、寝に帰るような所は家とは呼べないのではないかと。もっとポジティブに家を考えてほしいのです。それには、山本理顕さんの「国家と住宅の間を設計せよ」という視点が必要かもしれません。その人なりのとらえ方ができるとと思います。原広司さんは「有孔体」(1967年)として、「建築は閉じた空間に孔を開ける行為だ」といいました。孔を開けるというのは、呼吸し始めるということです。それは、死から生命へという逆向きの方向ですが、では何に向けて穴を開けるのか、そこに呼吸を与えるという考え方で建築を考えることは可能性があるかもしれない。

堀部 街との関わりもあります。街との関わりが呼吸し合うことでもあります。他者が入り込んだり、出て行ったりする、軒を一時借りるような行為がその家の呼吸に繋がるかもしれません。

小嶋 そうですね。定年を迎えて、毎日会社に行かなくてもよくなった時、家の外に出る理由がある家なのか、ない家なのかというのは社会的な呼吸ができているのかどうかといえます。どちらにしても、呼吸することはこんなに楽しいのだ、というふうに、この課題をとらえてほしいと思います。

(2015年4月22日大和ハウス工業東京本社にて。文責:本誌編集部)

